

源代遺跡 第2地点

平田4地区統合小学校整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021年12月

出雲市教育委員会

源代遺跡 第2地点

平田4地区統合小学校整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021年12月

出雲市教育委員会

序

本書は、2019（令和元）年度・2020（令和2）年度に実施した、平田4地区統合小学校整備事業に伴う源代遺跡第2地点発掘調査の成果を記録したものです。

源代遺跡第2地点は弥生時代以降の遺物散布地で、出雲平野の北東、出雲市国富町・西郷町にまたがって所在します。

今回の調査では、河川跡から弥生時代～古代を中心とした時期の遺物を発見しました。特に、古代の墨書き土器と『出雲國風土記』に記された「宇加川」及びその前身と考えられる河川跡の発見は、古代の行政区画や行政関連施設の位置を考える上で重要な成果となりました。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様や関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2021（令和3）年12月

出雲市教育委員会

教育長 杉谷 学

例　言

1. 本書は、2019(令和元)年度・2020(令和2)年度に出雲市が実施した、平田4地区統合小学校整備事業に伴う源代遺跡（島根県遺跡番号X107）第2地点埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は下記の体制、期間で実施した。

調査地及び調査面積　島根県出雲市国富町1371番地3外 約485m²

調査期間　2020(令和2)年1月21日(試掘確認調査)
2020(令和2)年6月8日～6月24日(範囲内容確認調査)

調査体制　<2019(令和元)年度>　試掘確認調査

事務局	木村寧(出雲市市民文化部次長兼文化財課長)
調査員	須賀照隆(同 文化財課埋蔵文化財1係主任)

<2020(令和2)年度>　範囲内容確認調査

事務局	片寄友子(出雲市市民文化部次長兼文化財課長)
調査員	須賀照隆(同 文化財課埋蔵文化財1係主任)
調査補助員	加藤章三(同 文化財課会計年度任用職員)
整理作業員	荒木恵理子(同 文化財課会計年度任用職員)
発掘調査支援	(株)トーワエンジニアリング(安全管理・発掘作業員雇用・機材借上等委託)

<2021(令和3)年度>　報告書作成

事務局	片寄友子(出雲市市民文化部次長兼文化財課長)
調査員	須賀照隆(同 文化財課埋蔵文化財1係長)
3. 本書の編集・執筆は職員の協力を得て、須賀が行った。
4. 本書に掲載した遺物の実測は須賀、加藤、吉村香織(調査補助員 会計年度任用職員)が行った。
5. 図面・遺物の整理作業は須賀、荒木、前島浩子(整理作業員 会計年度任用職員)が行った。
6. 本書に掲載した写真は須賀が撮影した。
7. 本書に掲載した遺物及び実測図、写真は出雲市文化財課が保管している。
8. 出土品のうち、金属製品・木製品は株式会社吉田生物研究所に保存処理を委託した。
9. 本書で使用した方位は、座標北を示す。座標は、世界測地系第III系に基づくものである。標高は海拔高を示す。
10. 本書の作成にあたり、編年及び過去の近隣調査については、下記の文献を参考とした文

[編年参考文献]

○弥生土器

赤澤秀則 1992「出土遺物・時期」『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告

書5鹿島町教育委員会

正岡睦夫・松本岩雄編 1992『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 木耳社

○土師器

松尾充晶 2006a 「赤彩土師器」「青木遺跡Ⅱ（弥生～平安時代編）」第3分冊（奈良・平安時代） 国道431号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 島根県教育委員会

松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相一大東式の再検討ー」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会

松山智弘 2000 「小谷式再検討ー出雲平野における新資料からー」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会

○須恵器

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会』第11集 島根考古学会

大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 平田市教育委員会

岡田裕之ほか 2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』 島根県古代文化センター

○漆器

四柳嘉章 1995 「漆器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

〔過去の近隣調査参考文献〕

出雲市教育委員会 2012 『中村1号墳』出雲市の文化財報告 15

国富郷土誌編纂委員会 1997 「第二編 原始・古代の国富」『国富郷土誌』 国富公民館

島根県教育委員会 2020a 「令和元年度国営土地改良事業に伴う埋蔵文化財確認調査の結果について（通知）」

島根県教育委員会 2020b 「令和2年度国営土地改良事業に伴う埋蔵文化財確認調査の結果について（通知）」

平田市教育委員会 1993a 『平田市遺跡地図』平田市埋蔵文化財調査報告書第3集

平田市教育委員会 1993b 『源代遺跡1』平田市埋蔵文化財調査報告書第4集

平田市教育委員会 1994 『源代遺跡2』平田市埋蔵文化財調査報告書第5集

平田市教育委員会 1998 『山根垣古墳・西西郷廃寺』平田市埋蔵文化財調査報告書第6集

平田市教育委員会 2004 『金山地区県営土地改良総合整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』平田市埋蔵文化財調査報告書第11集

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	8
第1節 調査の概要	8
第2節 河川跡の調査	9
第3節 出土遺物	16
第4章 総括	22
第1節 河川跡について	22
第2節 出土遺物について	23
第3節 結語	25

挿図目次

第1図 周辺調査状況と源代遺跡の範囲	2	第11図 河川跡①出土遺物実測図1	17
第2図 出雲平野の主要遺跡	4	第12図 河川跡①出土遺物実測図2	18
第3図 源代遺跡周辺の遺跡	5	第13図 河川跡①出土遺物実測図3	19
第4図 奈良時代の郡都図	6	第14図 その他の遺物実測図1	20
第5図 調査区配置図	10	第15図 その他の遺物実測図2	21
第6図 調査地土層堆積状況図	11	第16図 源代遺跡周辺の遺跡と地形分類図	22
第7図 A区・B区全体図	12	第17図 奈良時代の地理環境	23
第8図 A区トレチ実測図	14	第18図 源代遺跡第2地点出土墨書き器の文字	23
第9図 B区トレチ実測図	15	第19図 鉄製U字形鍛先「特大類」の類例	24
第10図 河川跡②出土遺物実測図	16	第20図 近隣の樹皮結合曲物容器出土遺跡	25

写真図版目次

図版1 調査前	4 トレチ土層堆積状況
A区	5 トレチ土層堆積状況
B区	図版6 河川跡②出土遺物
図版2 A区河川跡①②土層堆積状況1	河川跡①出土遺物1
A区河川跡①②土層堆積状況2	図版7 河川跡①出土遺物2
図版3 B区河川跡①土層堆積状況	図版8 河川跡①出土遺物3
図版4 B区河川跡①②土層堆積状況 墨書き器「夾」出土状況	図版9 その他の遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

2018（平成30）年度

2018（平成30）年、出雲市国富町地内の平田4地区統合小学校整備事業予定地について、事業者（出雲市教育委員会教育施設課）から埋蔵文化財に係る事前協議を受けた。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、源代遺跡の隣接地であり事業予定地内にも遺跡が続いている可能性があると判断し、事前の試掘確認調査を実施することで合意した。

2019（令和元）年度

2020（令和2）年1月9日に事業者から埋蔵文化財確認調査の依頼を受け、同年1月21日に7所計42m²を対象として重機掘削による試掘確認調査を実施した。調査の結果、複数の調査地点で遺跡の存在を確認し、源代遺跡の範囲が事業予定地の一部まで広がっていることが確認できた。また、これまでの近隣地の調査結果を踏まえ、今回の調査地を含む遺跡の広がりを源代遺跡第2地点として取り扱うこととした（第1図）。

その後、事業者と島根県教育庁文化財課、出雲市文化財課で遺跡保護措置についての協議を重ねた結果、着工前に詳細な範囲内容確認調査を実施することで合意した。

2020（令和2）年度

2020（令和2）年4月2日に事業者から範囲内容確認調査の依頼を受け、同年6月8日から発掘調査を開始した。事業予定地内において遺物密度の高いエリアに調査区2所を設定し、重機掘削と人力掘削によって調査を進めた。調査面積は2所計で約442m²、内45m²が人力掘削による調査面積である。同年6月24日には現地調査を終了し、その後埋め戻しを行った。

<源代遺跡の発掘調査に関する主な文化財保護法上の文書等>

2020（令和2）年

3月10日 「埋蔵文化財発掘の通知について」事業者から市教委経由で県教委へ

4月 2日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」県教委から市教委経由で事業者へ

5月 25日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ

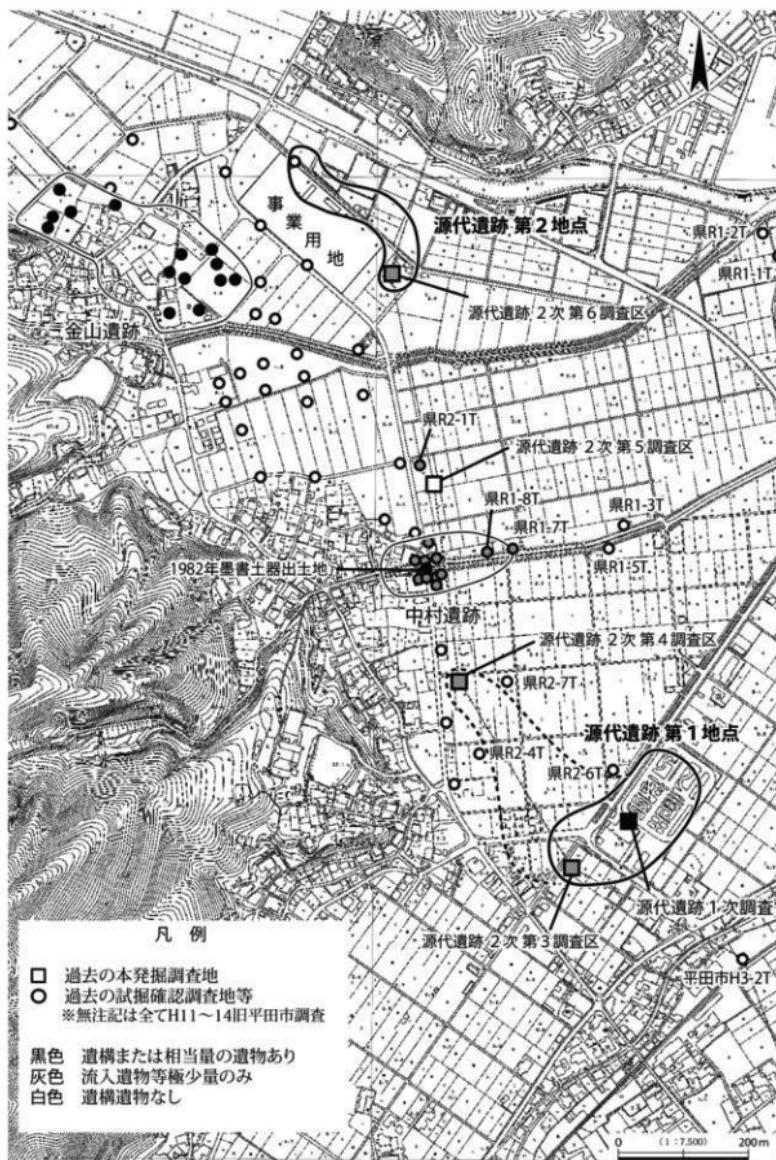
6月 29日 「埋蔵物発見届」市教委から出雲警察署へ

「埋蔵文化財保管証」市教委から県教委へ

7月 1日 「平田4地区統合小学校整備事業に伴う埋蔵文化財範囲内容確認調査について（報告）」市教委から県教委へ

「埋蔵文化財包蔵地調査補充カード」市教委から県教委へ※包蔵地範囲変更

7月 7日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について」県教委から市教委へ



第1図 周辺調査状況と源代遺跡の範囲

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

出雲平野は南北を中国山地と島根半島に、東西を宍道湖と日本海沿岸部の砂丘に挟まれた、東西約20km、南北約5kmにわたる県内最大の沖積平野である。平野を形成した二大河川、斐伊川と神戸川がそれぞれ中国山地から宍道湖と日本海に注いでいる（第2図）。

源代遺跡は出雲平野の北東、出雲市国富町・西郷町地内に所在する（第3図）。北方の島根半島山中から流れ出る平田船川、西方の旅伏山中腹から流れ出る金山川、丹堀川によって形成された沖積平低地上に立地し、現状は西の旅伏山と北東の低丘陵地との間に形成された水田地帯となっている。

源代遺跡の中心期である弥生時代～古代には出雲大川（奈良時代の斐伊川）の本流は西方の潟湖へ注ぎ、入海（奈良時代の宍道湖）は遺跡の近くまで迫っており、現在とは大きく異なる景観が広がっていたと考えられる（第3・4図）。

第2節 歴史的環境

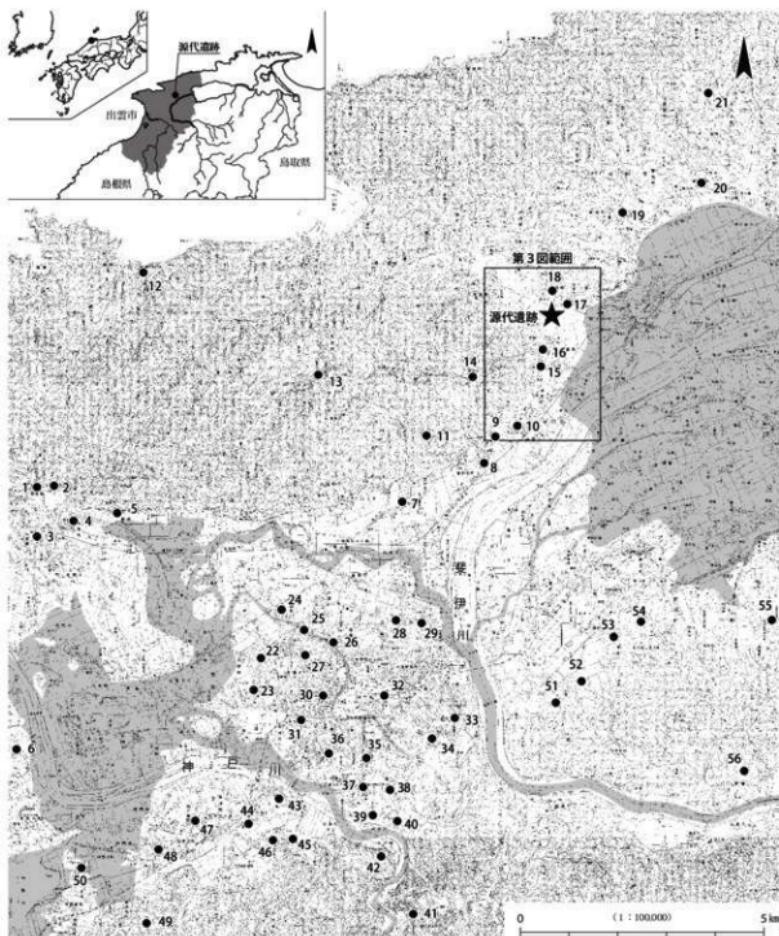
1 繩文時代

出雲平野における確実な遺跡の初現は、海進期にあたる縄文時代早期である。平野北部の山麓に所在する山持遺跡（第2図7）、菱根遺跡（第2図5）や平野西端の砂丘上に所在する上長浜貝塚（第2図6）などが知られている。中期までは山麓付近に数例の遺跡が確認されるのみである。その後、海退が進んだ後晩期になると遺跡数が増加し、出雲大社境内遺跡（第2図1）や三田谷I遺跡（第2図39）、後谷遺跡（第2図52）などの山麓部付近を中心とした遺跡のほか、矢野遺跡（第2図24）、蔵小路西遺跡（第2図27）、壱丁田遺跡（第2図23）など、平野中央部においても遺跡が確認されるようになる。

源代遺跡周辺地域（第3図）では縄文時代の遺跡はほとんど確認されていないが、源代遺跡第1地点から縄文土器片が少量ながら確認されている。

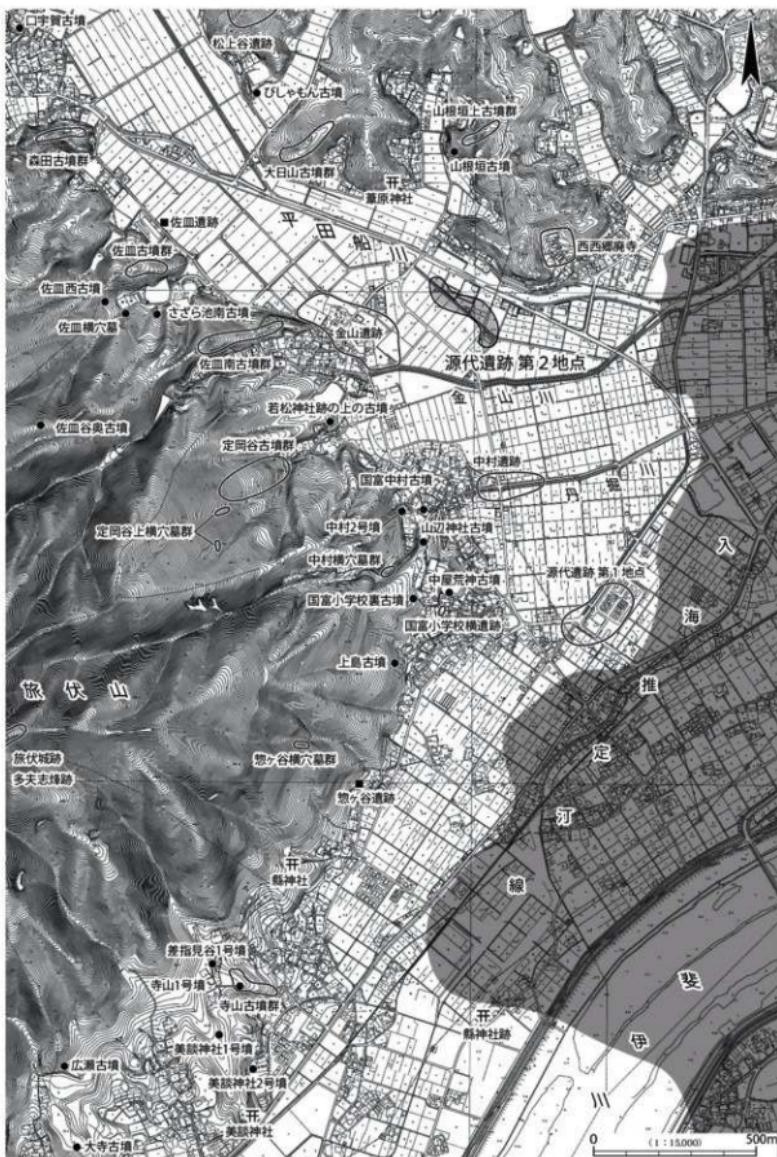
2 弥生時代

弥生時代になると平野部の集落が大きく発達する。縄文時代から継続して発達した矢野遺跡（第2図24）などのほか、中期から後期を中心に急速に発達した白枝荒神遺跡（第2図22）、古志本郷遺跡（第2図43）、天神遺跡（第2図31）、中野清水遺跡（第2図29）、青木遺跡（第2図8）など、大規模な集落が平野部各所で展開されるようになった。当該期には、これらの大規模集落を中心に吉備や九州、朝鮮半島などとの交流を示す出土品が確認されており、出雲平野を中心に各地との活発な交流があったことがわかる。そのほか特筆すべき遺跡として、中期までの大量の青銅器が埋納された平野南東丘陵地の荒神谷遺跡（第2図55）、後期後葉以降の「王墓」とされる巨大な四隅突出型墳丘墓が築かれ

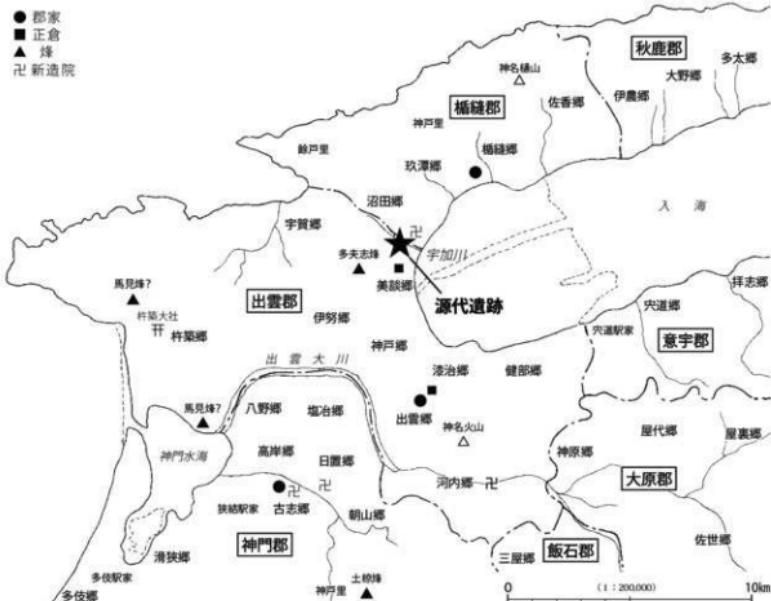


1. 出雲大社境内遺跡 2. 真名井遺跡 3. 鹿藏山遺跡 4. 原山遺跡 5. 蓼根遺跡 6. 上長浜貝塚 7. 山持遺跡
 8. 青木遺跡 9. 大寺古墳 10. 美談神社古墳群 11. 鶯ヶ巣城跡 12. 猪目洞窟遺跡 13. 鰐淵寺境内 14. 多夫峰跡
 15. 上島古墳 16. 国富中村古墳ほか 17. 西西郷廐寺 18. 山根垣古墳 19. 山崎古墳 20. 奥屋敷古墳 21. 小谷下古墳
 22. 白枝荒神遺跡 23. 卷丁田遺跡 24. 矢野遺跡 25. 小山遺跡 26. 姫原西遺跡 27. 藏小路西遺跡 28. 中野美保遺跡
 29. 中野清水遺跡 30. 海上遺跡 31. 天神遺跡 32. 今市大念寺古墳 33. 西谷墳墓群 34. 長者原廣寺・菅沢古墓
 35. 上塙治篠山古墳・篠山遺跡 36. 神門寺境内廐寺 37. 上塙治地蔵山古墳 38. 上塙治横穴墓群 39. 三田谷I遺跡
 40. 光明寺古墳群 41. 朝山古墓 42. 小坂古墳・刈山古墳群 43. 古志本郷遺跡・下古志遺跡 44. 宝塚古墳 45. 放レ山古墳
 46. 妙蓮寺山古墳 47. 知井宮多聞院遺跡 48. 神門嶺穴墓群 49. 北光寺古墳 50. 山地古墳 51. 出西小丸古墳群
 52. 後谷遺跡ほか 53. 上ヶ谷遺跡 54. 杉沢遺跡・出雲国山陰道路ほか 55. 荒神谷遺跡 56. 天寺平廐寺

第2図 出雲平野の主要遺跡 ※網掛けは弥生時代の推定水域



第3図 源代遺跡周辺の遺跡



第4図 奈良時代の郡郷図

た斐伊川左岸丘陵上の西谷墳墓群（第2図33）があげられる。

源代遺跡周辺地域（第3図）でも、源代遺跡第1地点で弥生時代中期を中心とした時期の遺構と遺物が確認されているほか、佐皿遺跡、金山遺跡、美談神社2号墳下層でも遺物が確認されている。出土遺物の中でも、源代遺跡第1地点から発見された玉作関連遺物、美談神社2号墳下層から発見されたシカ絵画土器などが特に注目される。

3 古墳時代

古墳時代に入ると、弥生時代から継続して営まれた平野部の集落は中期までに急激な衰退をみせる。中・後期に継続する集落も存在するが、弥生時代のような大規模な集落の存在は明確でない。一方、平野縁辺の山麓部においては三田谷I遺跡（第2図39）など、中期から後期にかけて拡大をみせる集落が確認される。古墳については、前・中期において前期末の大寺古墳（第2図9、第3図）、山地古墳（第2図50）、中期中葉の北光寺古墳（第2図49）などが知られるが、確認される築造数は少ない。その後、後期後半以降は神戸川右岸に今市大念寺古墳（第2図32）、上塙治築山古墳（第2図35）など、出雲西部最大級の古墳が次々と築造され、古墳の築造数も急激に増加する。この頃には横穴墓も盛ん

に造られ、神戸川右岸の上塩治横穴墓群（第2図38）、左岸の神門横穴墓群（第2図48）などで大規模な横穴墓群が築造された。

源代遺跡周辺地域（第3図）においても前・中期の古墳は少ないが、後期の6世紀中葉以降は中小規模の古墳・横穴墓が多数築造される。平田船川右岸側の代表例として上島古墳、国富中村古墳などが、左岸側の代表例として山根垣古墳があげられる。

4 古代

古代の遺跡としては、特に『出雲國風土記』記載施設の関連遺跡が注目される。官衙関連遺跡としては神門郡家と推定される古志本郷遺跡（第2図43）、出雲郡家付属の正倉跡と推定される後谷遺跡周辺（第2図52）などが知られる。寺院関連遺跡としては朝山郡郷新造院の可能性が指摘される神門寺境内廃寺（第2図36）、河内郷新造院の可能性が指摘される天寺平廃寺（第2図56）、沼田郷新造院と推定される西西郷廃寺（第2図17、第3図）などがある。道路関連遺跡として正西道と考えられる出雲國山陰道跡（第2図54）が、烽関連遺跡としては旅伏山山頂部の多夫志烽跡（第2図14、第3図）などが知られている。神門郡家関連遺跡と推定される三田谷I遺跡（第2図39）、神社・官衙関連遺跡と推定される青木遺跡（第2図8）、道路跡や仏教祭祀などが確認された山持遺跡（第2図7）なども当該期を代表する遺跡として挙げられよう。また、光明寺3号墓（第2図40）、小坂古墳（第2図42）、菅沢古墓（第2図34）、朝山古墓（第2図41）といった、火葬骨を納めた骨壺器を持った墳墓が神門川両岸の丘陵地を中心に分布することも注目される。

源代遺跡周辺地域（第3図）においては、前述の西西郷廃寺のほか、「草」「中」「人」などと記された墨書き土器が出土した中村遺跡が注目される。前者は平田船川左岸に、後者は右岸に立地している。当地域は『出雲國風土記』記載の橋縫郡沼田郷と出雲郡美談郷にあたり、その境界に「宇加川」が流れていた（第4図）。この川の名は現在消失しているが、現在の「平田船川」がそれにあたる。また、遺跡北方に所在する葦原神社、南西方に所在する美談神社・縣神社は、それぞれ『出雲國風土記』記載の橋縫郡「葦原社」出雲郡「彌太彌社」「縣社」に比定される神社である。

以上のように、出雲平野の北東に位置する源代遺跡周辺地域は、弥生時代から古代を中心重要な遺跡が数多く確認されている重要な地域である。

参考文献

加藤義成 1989『改訂 出雲國風土記研究』今井書店（改訂三版、初版は1957年）

高橋周 2011「弥生時代の出雲平野における水域復元」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第1集 出雲弥生の森博物館

出雲市教育委員会 2012『中村I号墳』出雲市の文化財報告15

国富郷上誌編纂委員会 1997「第二編 原始・古代の国富」『国富郷上誌』 国富公民館

平田市教育委員会 1993a『平田市遺跡地図』平田市埋蔵文化財調査報告書第3集

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

1 調査方法の概要（第5図）

事前の試掘確認調査として、3m×2mの調査区を7箇所（1～7トレンチ）設定し、重機によつて徐々に掘り下げて遺構・遺物の有無を確認した。調査位置の選定にあたっては、過去の近隣調査データを参考として事業用地東部を中心に確認することとした。調査面積計42m²、現地調査は2020（令和2）年1月9日に実施した。

その後、遺物密度の高いエリアに28m×7.9mの調査区2所（A区・B区）を設定し、詳細な範囲内容確認調査を実施した。試掘確認調査で確認した古代の遺物包含層上面（河川跡①上面）付近まで重機掘削による調査を行い、その後各調査区内に15m×1.5mのトレンチを設定して人力掘削による調査を行った。調査面積は重機掘削面積約442m²、内45m²が人力掘削によるトレンチ調査面積である。現地調査は2020（令和2）年6月8日から同年6月24日まで実施した。

2 基本層序（第6図）

今回の調査地周辺の土層堆積状況は均一ではないが、各期の河川跡・流路跡等の基盤層を基準として、第6図のとおりI～IV層に大別した。中世以降の流路等検出面をII層上面、古代までの河川跡検出面をIII層上面、古墳時代までの河川跡検出面をIV層上面としている。なお、出土遺物については基本的に各河川跡・流路跡等内における出土遺物が中心であり、基本層序であるI～IV層ではほとんど出土していない。

また、1～3・6トレンチ及び過去の隣接地調査地である2次調査第6調査区（平田市教育委員会1993b）、平成11年度0トレンチ（平田市教育委員会2004）において確認できる黒褐色土層は旧表土と考えられ、古代の河川堆積層上面付近に連続する同一土層である可能性が高い。1・2トレンチと2次調査第6調査区ではこの旧表土層直下に古代河川氾濫層かと考えられる砂層が確認できる。

3 成果の概要（第1・5・6図）

調査の結果、4・5トレンチ及びA・B区付近では標高1.5m付近以下で古代までの河川堆積層（河川跡①）を、標高0.5m付近以下で古墳時代までの河川堆積層（河川跡②）を確認した。河川跡からは相当量の遺物を発見したが、その他当時の生活痕跡は全く確認できず、上流部や対岸の生活空間から流入したものと考えられる。

なお、隣接する2次調査第6調査区では、調査区南東部において急激な地形の落ち込みが確認されているほか、古代の河川氾濫層等と思われる土層からは杓文字状木製品なども出土している。これら

の地形や遺物を伴う河川氾濫層は、今回の調査で確認した河川跡と連続性を持つものと考えて良いであろう。

源代遺跡の遺跡範囲については、これまで過去の発掘調査地点である1次調査地点（平田市教育委員会1994）及び2次調査3・4・5・6調査区（平田市教育委員会1993b）の5地点を点として示していたものであり（平田市教育委員会1993a），面的な広がりについては明らかでなかった。しかしながら、その後1999（平成11）年度から2002（平成14）年度にかけて実施された土地改良事業に伴う確認調査（平田市教育委員会2004），2019（令和元）年度～2020（令和2）年度に実施された農地整備に伴う確認調査（島根県教育委員会2020ab）等周辺調査データの蓄積により全体の分布状況が徐々に明らかになってきている。これまでの調査状況から、源代遺跡の広がりとしては南部と北部が分断されることが明らかであるため、1次調査地点付近の源代遺跡南部エリアを第1地点、今回の調査地を含む北部エリアを第2地点と呼称することとした（第1図）。

第2節 河川跡の調査

1 試掘確認調査（第5・6図、図版5）

試掘確認調査地点7所の内、4・5トレーナーで弥生時代から古代の遺物を伴う河川堆積層を確認した。各トレーナーの概要は以下のとおりである。

1トレーナー

事業予定地東端角に設定した調査区である。地表下2.85m、標高-0.25m前後まで調査を実施したが、遺構・遺物は確認できなかった。基盤層IV層の標高は0m前後である。

2トレーナー

1トレーナーの北西約33mの位置に設定した調査区である。地表下2.4m、標高0.2m前後まで調査を実施したが、遺構・遺物は確認できなかった。基盤層IV層の標高は0.4m前後である。

3トレーナー

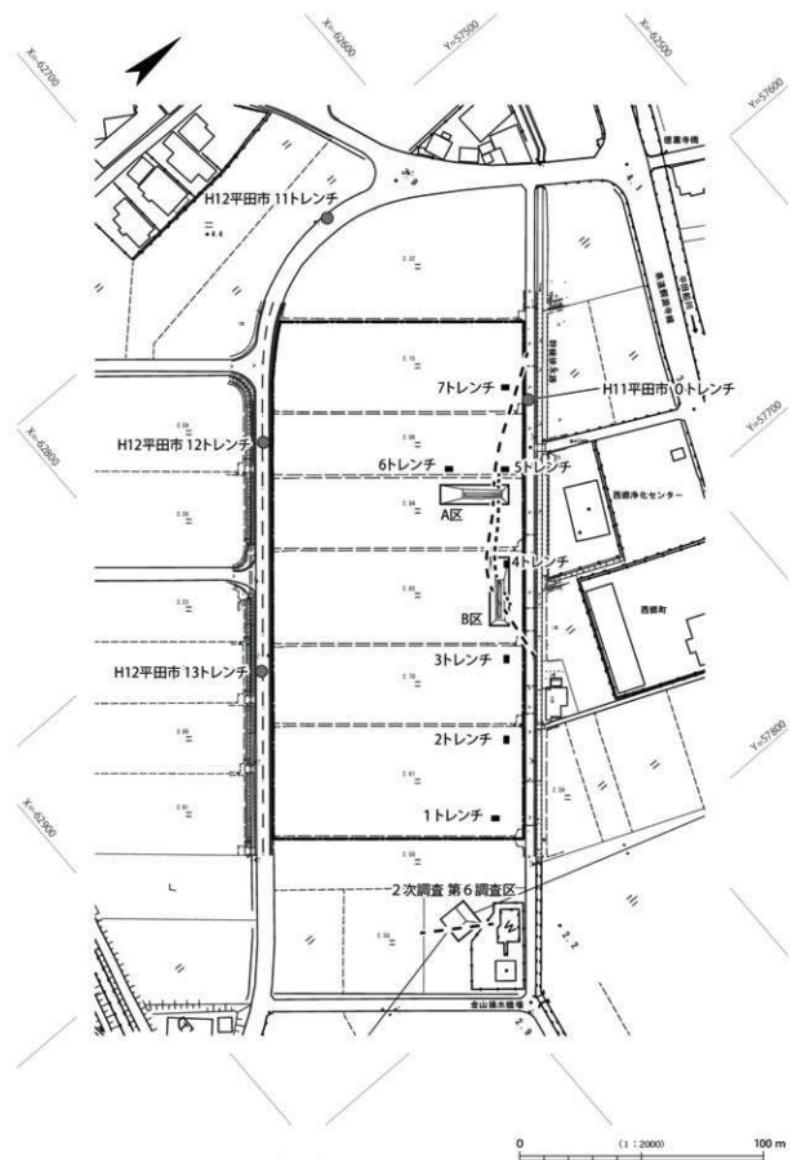
2トレーナーの北西約33mの位置に設定した調査区である。地表下2.8m、標高-0.1m前後まで調査を実施した。遺構は確認できなかったが、標高1.8m前後、II層上面付近から極少量の土器片が出土した。流入遺物であろう。基盤層IV層の標高は0.4m前後である。

4トレーナー

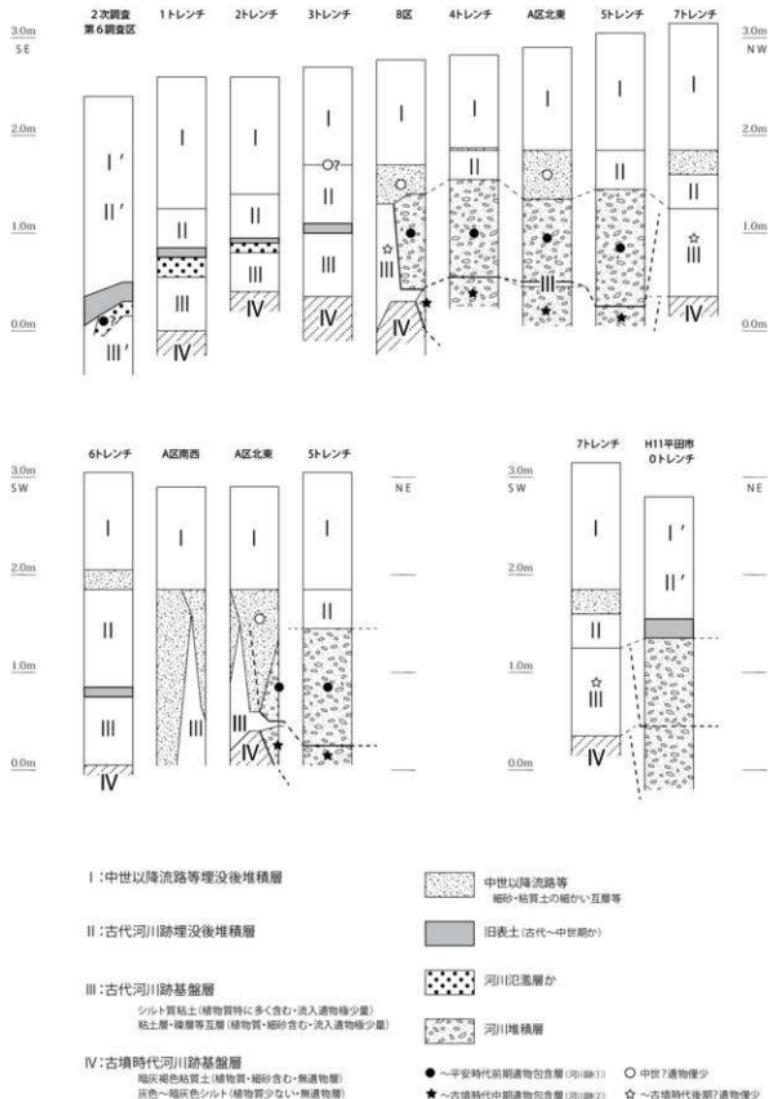
3トレーナーの北西約39mの位置に設定した調査区である。地表下2.6m、標高0.25m前後まで調査を実施した。標高1.55m以下で弥生時代～古代の遺物を含む河川堆積層を確認した。特に標高0.6m以下に堆積する河川堆積層下層（河川跡②）から出土遺物が多く確認できた。

5トレーナー

4トレーナーの北西約38mの位置に設定した調査区である。地表下3m、標高0.05m前後まで調査を実施した。標高1.45m以下で弥生時代～古代の遺物を含む河川堆積層を確認した。特に標高0.25m以下に堆積する河川堆積層下層（河川跡②）から出土遺物が多く確認できた。



第5図 調査区配置図



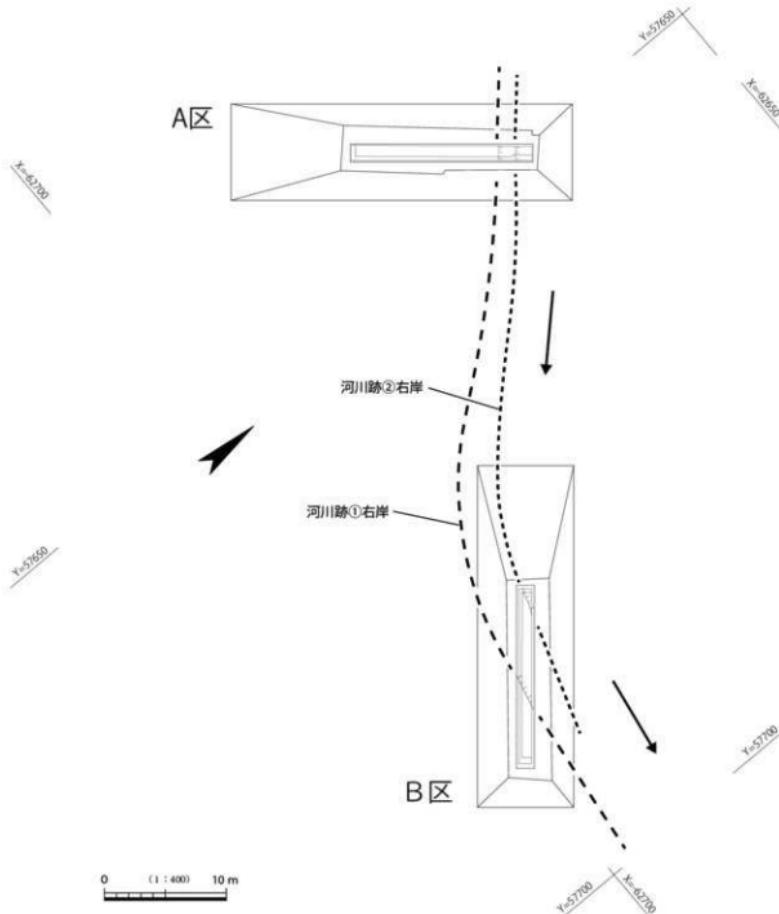
第6図 調査地点土層堆積状況図

6 トレンチ

5 トレンチの南西約 23 m の位置に設定した調査区である。地表下 3.1 m、標高 - 0.05 m 前後まで調査を実施したが、遺構・遺物は確認できなかった。基盤層IV層の標高は 0.1 m 前後である。

7 トレンチ

5 トレンチの北西約 34 m の位置に設定した調査区である。地表下 3 m、標高 0.15 m 前後まで調査を実施した。遺構は確認できなかったが、標高 1.25 ~ 0.35 m に堆積するⅢ層・暗灰褐色シルト質粘土層から木材小片が出土した。基盤層IV層の標高は 0.4 m 前後である。



第7図 A区・B区全体図

2 A区の調査（第7・8図、図版1・2）

5・6トレンチ間の様相を確認するため、南西一北東方向を長辺に設定した調査区である。

標高1.7m前後までは上から耕作土・暗灰褐色粘質土・橙色砂層・橙褐色粘質土（以上①層）が堆積しており、混入資料等から近世以降の堆積であることが確実である。基本層序I層にあたる。標高1.7m前後以下0.4m前後までは、上からシルト質粘土（②層）・淡灰褐色粘質土（③層）・灰褐色粘土（④層）・暗灰褐色礫層（⑤層）の順に堆積しており、基本層序Ⅲ層にあたる。以下、暗灰褐色粘質土（⑥層）が無遺物層である基本層序IV層である。

標高1.7m付近を基盤として、中世期以降の時期と考えられる流路跡または溝跡の痕跡が密に重なりあっていることが確認できる。重機掘削調査中に少量の遺物が出土しているが、詳細な性格・時期については不明である。

調査区北東端の④層上面においては、古代までの土器を含む河川堆積層（河川跡①）を確認した。ただし、前述した中世期以降の流路等によって河川の肩は破壊されており、本来は②層上面付近から落ち込むものと考えられる。確認できる河川底の標高は0.55mである。

調査区北東端⑥層上面においては、土師器・弥生土器等の小片を含んだ、南東一北西方向へ伸びる河川堆積層（河川跡②）を確認した。標高0.45m前後から落ち込む。河川底の標高は不明である。

3 B区の調査（第7・9図、図版1・3・4）

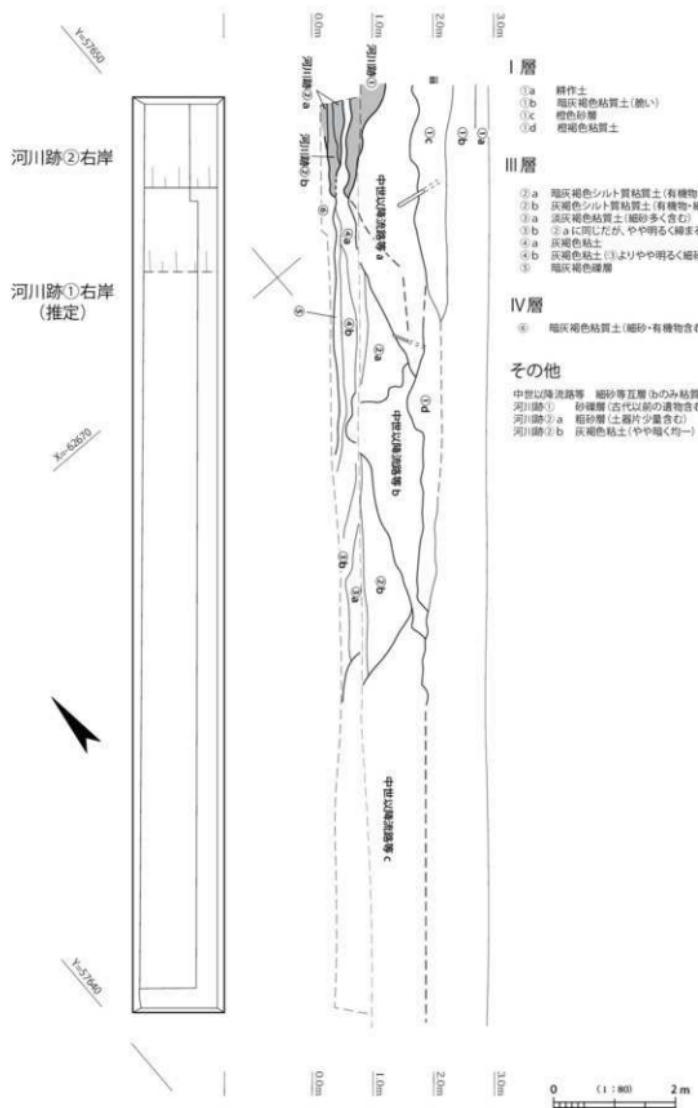
3・4トレンチ間の様相を確認するため、南東一北西方向を長辺に設定した調査区である。

標高1.6m前後までは上から耕作土・暗灰褐色粘質土・灰色粘土・橙褐色粘質土・淡灰色粘土（以上①層）が堆積している。A区の①層同様、近世以降の堆積土層であろう。基本層序I層にあたる。標高1.6m前後以下0.3m前後までは、上から淡緑灰色礫層（②層）・灰褐色砂混じり粘質土（③層）・緑灰色礫層（④層）・暗褐色粘質土（⑤層）・灰褐色粘土（⑥層）の順に堆積しており、基本層序Ⅲ層にあたる。以下、暗灰褐色粘質土（⑦層）が無遺物層である基本層序IV層である。

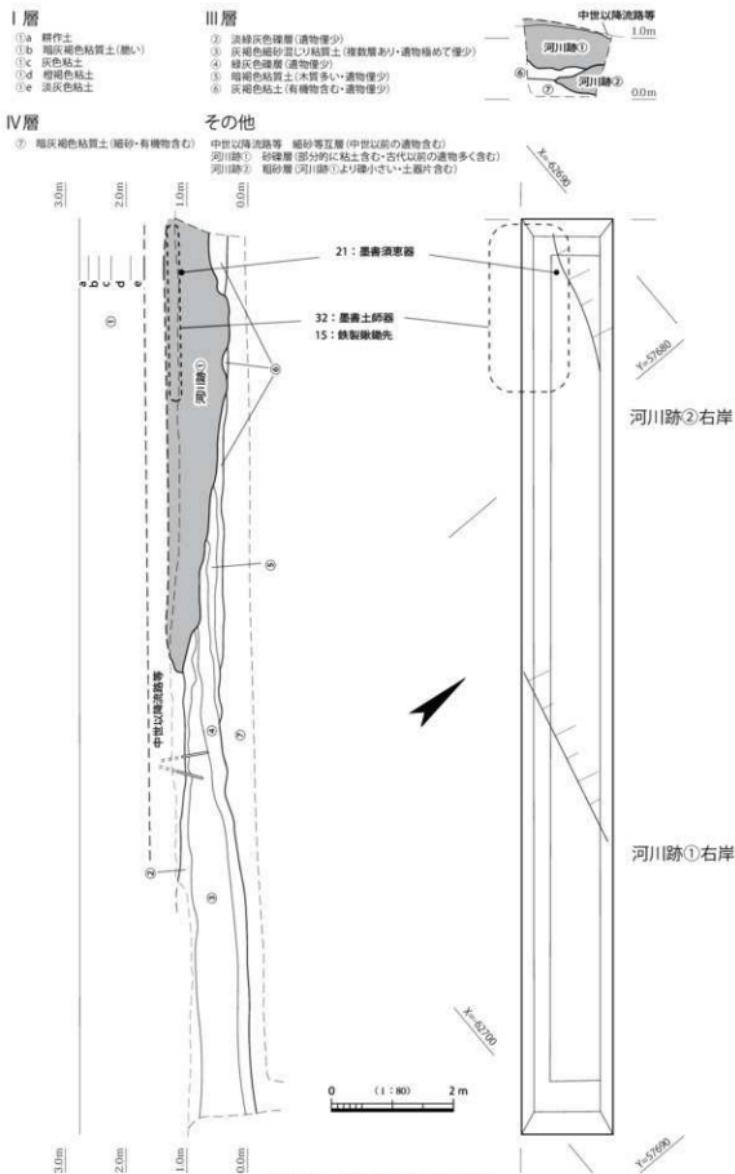
中世以降流路内堆積層と推定した①層の堆積は調査区のほぼ全域ではほとんど確認でき、調査区にほぼ平行して南東一北西方向に伸びていたものと考えられる。

調査区北半部の②層上面においては、古代の遺物を特に多く含む、東西方向に伸びる河川堆積層を確認した。A区で確認した河川跡①に連続するものと考えられる。現状では堆積土最高所の標高が1.35m、確認できる河川底の標高が0.3mである。なお、本来の河川跡上面は中世流路跡によって削平されていることが想定され、試掘4トレンチの状況からは標高1.5m前後から落ち込んでいたものと推定できる。

調査区北端の⑦層上面においては、土師器・弥生土器等の小片を含んだ、東西方向へ伸びる河川堆積層（河川②）を確認した。A区で確認した河川跡②に連続するものと考えられる。標高0.3m前後から落ち込む。河川底の標高は不明である。



第8図 A区トレーンチ実測図



第3節 出土遺物

1 河川跡②出土遺物（第10図、図版6）

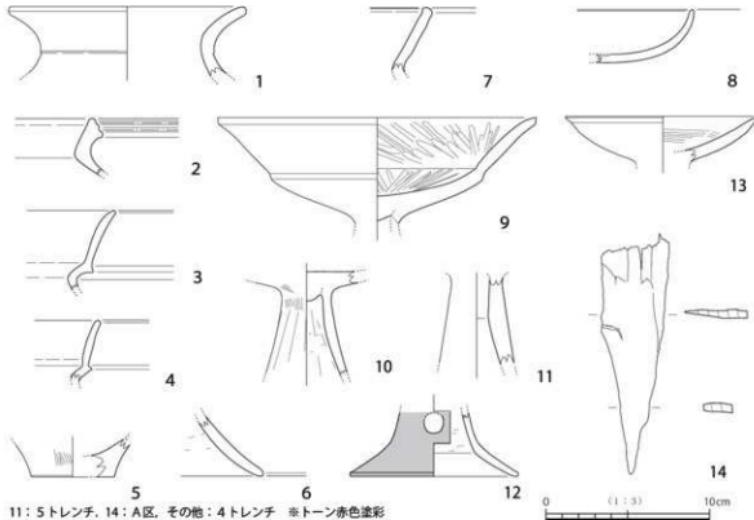
河川跡②からは弥生土器、土師器、木製品が出土した。図化できなかった小片資料を含め、須恵器は全く混入していない。なお、A区及びB区の調査では河川跡②の検出面積が極めて狭いため、図化可能な資料は4トレンチに集中している。以下に概略を記す。

1～6は弥生土器である。1は壺の口縁部である。頸部に低い段が確認できる。2～4は甕の口縁部である。2では口縁拡張部に2条の凹線文が確認できる。5は甕の底部である。6は鼓形器台等の脚部であろう。

7～13は土師器である。7は甕の口縁部である。単純口縁で、端部は内向きに肥厚している。8は杯である。9は高杯の杯部である。内面に丁寧なミガキが確認できる。10～12は高杯の脚部である。12では円形スカシ、外側赤色塗彩が確認できる。13は小型器台等であろうか。内面に粗いハケメ痕が確認できる。

14は木製品である。残存状態が不良のため本来の形状からは不明であるが、板材の端部が杭状に加工されている。樹種はスギである。

河川跡②出土遺物の内、最も古い資料が1で弥生時代前期後葉頃の弥生土器、最も新しい資料が8



第10図 河川跡②出土遺物実測図

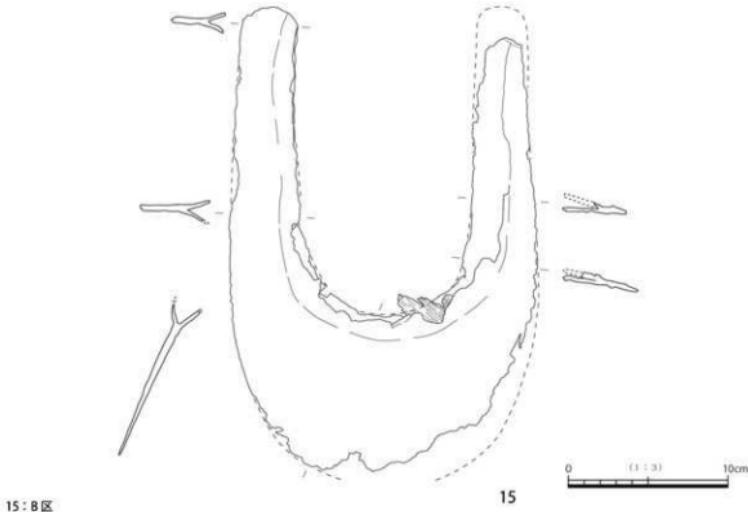
で古墳時代中期中葉から後葉頃の土師器である。須恵器の混入も全く確認できないことから、河川跡②は古墳時代中期中葉以降、須恵器の使用が盛行する時期までには埋没したものと考えられ、古墳時代中期後半頃の埋没が想定できる。

2 河川跡①出土遺物（第11～13図、図版6～8）

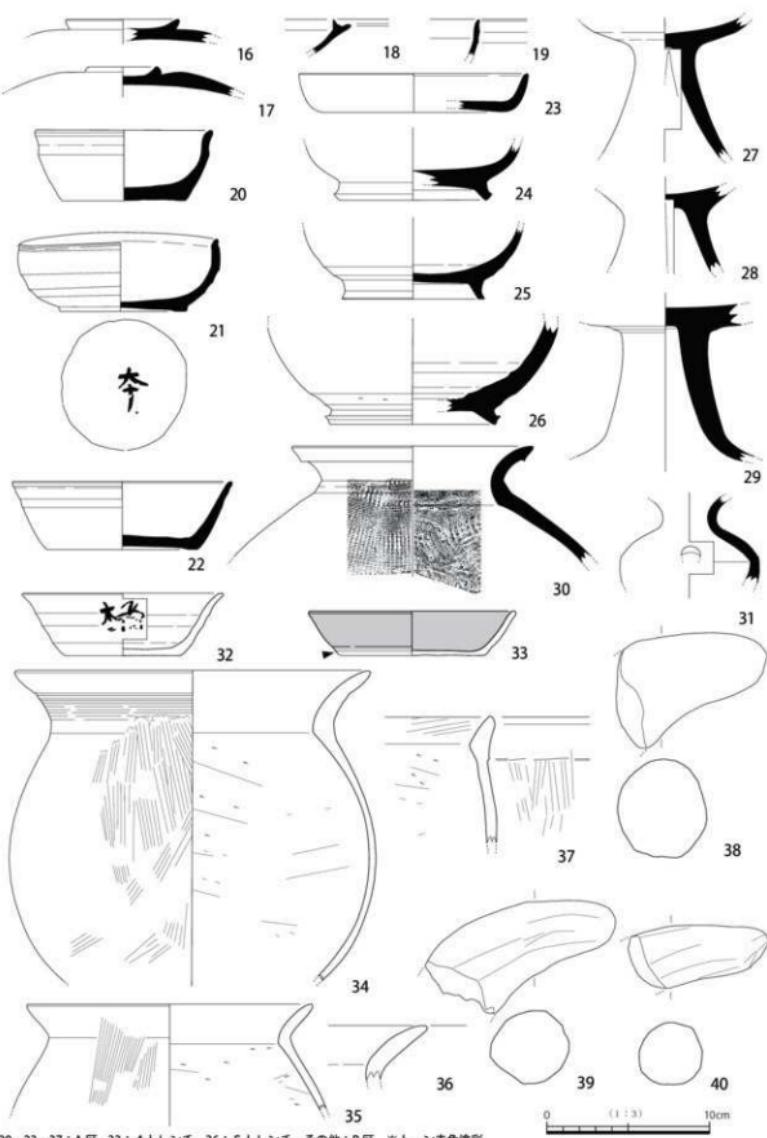
河川跡①からは金属器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、木製品が出土した。ただし、河川跡②の出土遺物の状況から古墳時代中期以前の出土資料は混入品と考えられるため、本項では古墳時代後期以降の資料について記述する。なお、図化可能な資料は中世流路等による破壊が少なく、最も検出面積の広いB区に集中している。以下に概略を示す。

15は金属製品の鉄製U字形鋸鋸先である。長さ29.1cm、幅19.2cmを測り、復元長は30cm前後になる大型品である（第4章第2節参照）。風呂装着部のえぐれ幅は深い部分で2cm前後、一部に「だい」と呼ばれる装着板の木材片が残存している。

16～31は須恵器である。16・17は杯蓋で、いずれも輪状つまみを有する。16の外側には緑色の自然釉が確認できる。18～22は杯である。18で受け部のかえりが、20～22で底部回転糸切痕が確認できるほか、21では底部外側中央に「本」の墨書が確認できる（第4章第2節参照）。23は皿である。底部に糸切痕が確認できる。24・25は高台付杯等の底部である。静止糸切痕が確認できる。26は高台付壺等の底部である。27～29は高杯である。27では2方向三角形スカシが、28では切れ目条の2方向スカシが確認できる。30は甕である。体部内外にタタキ痕が残り、外側には丁寧

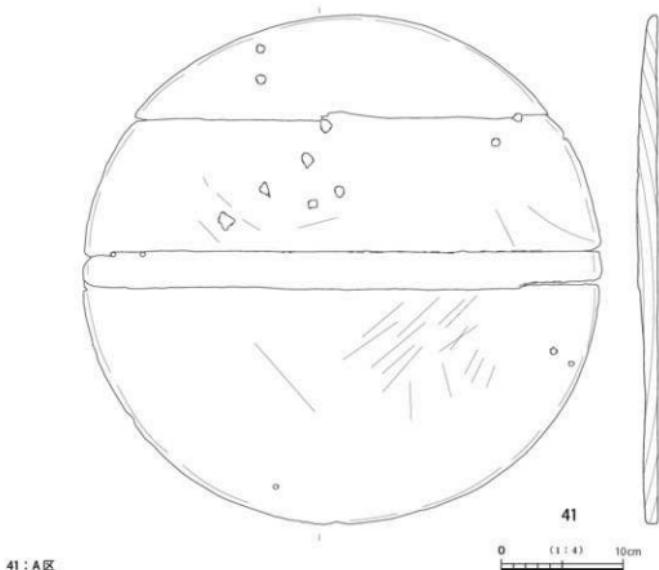


第11図 河川跡①出土遺物実測図1



20・23・37 : A 区, 33 : 4 トレンチ, 36 : 5 トレンチ, その他 : B 区 *トーン赤色塗彩

第 12 図 河川跡①出土遺物実測図 2



第13図 河川跡①出土遺物実測図3

なカキメが確認できる。31は縁である。

32～37は土師器である。32・33は杯である。32の外面には墨書が確認でき、「桶」の墨書であると推定した（第4章第2節参照）。33には底部外面を除き赤色塗彩の痕跡が残る。34～37は甕である。体部外面にハケメが、内面にケズリが確認できるほか、34には口縁部外面にヨコハケが、37には口縁部内面にナナメハケが確認できる。

38～40は土製品である。いずれも土製支脚の一部と考えられる。

41は木製品で、円形曲物容器の底板である（第4章第2節参照）。直径42cmの円形一枚板で、縁部には樹皮結合のための穿孔が2孔4箇所、1孔1箇所、その他人為的な粗雑な穿孔が6孔確認できる。樹種はスギである。

下層混入資料を除く河川跡①出土遺物の内、最も古い資料が27で6世紀末～7世紀前葉の須恵器、最も新しい資料が22・32・33で9世紀の須恵器と土師器である。河川跡①は6世紀末以降河川堆積が進み、9世紀の内には埋没したものと考えられる。

3 その他の遺物（第14・15図、図版9）

河川跡①出土混入遺物（第14図42～47）

42～47は河川跡①から出土した混入遺物と考えられる資料である。河川跡②または基本層序Ⅲ層から流入したものと考えられる。図化可能な資料は全てB区からの出土品である。

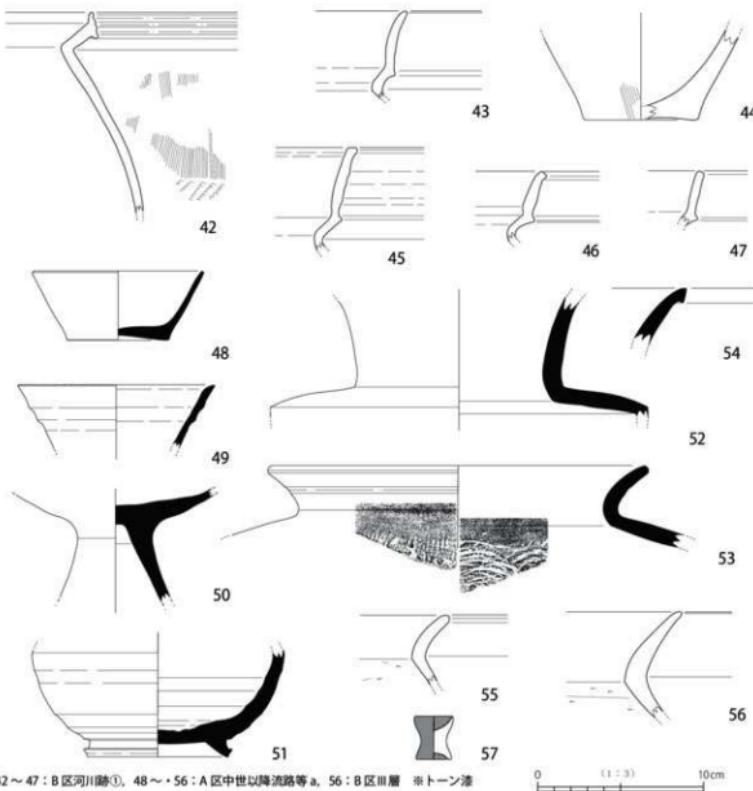
42～44は弥生土器の甕である。42では口縁拡張部に3条の凹線文が、体部最大径付近に列点文が確認できる。

45～47は土師器の甕である。いずれも複合口縁の端部に面を有するもので、45・46の端部は外向きに肥厚している。

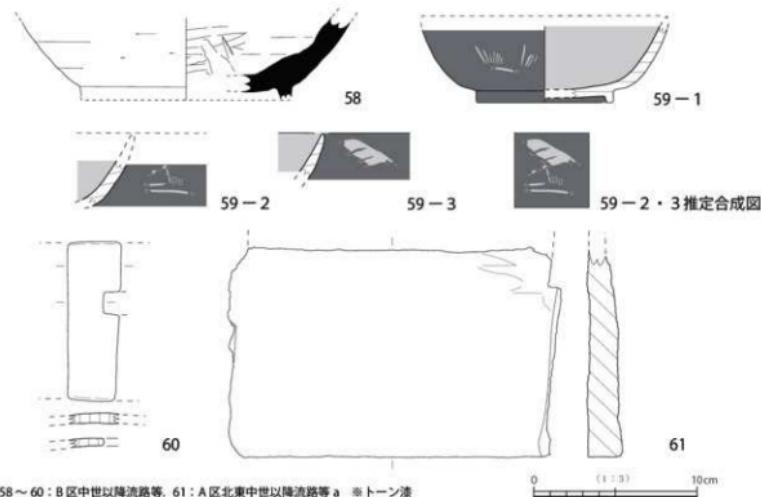
中世以降流路等出土混入遺物（第14図 48～56）

48～56は中世以降流路等から出土した混入遺物と考えられる資料である。河川跡①または基本層序Ⅱ層から流入したものと考えられる。図化可能な資料は全て河川跡①を大きく破壊しているA区中世以降流路等aからの出土品である。

48～53は須恵器である。48・49は杯である。48では底部回転糸切痕が確認できる。50は高杯、51・52は甕、53は甕、54は甕等の口縁部である。



第14図 その他の遺物実測図1



第15図 その他の遺物実測図2

55・56は土師器の裏である。

基本層序Ⅲ層出土遺物（第14図57）

基本層序Ⅲ層出土遺物は小片のみであり、図化可能な資料はB区④層から出土した57のみである。図化していない資料は基本的には土師質の土器片であるが、B区②層（基本層序Ⅲ層最上層）において若干の須恵器片も出土している。57は用途不明の土製品である。全面に褐色～黄褐色の漆状被膜が確認できる。祭祀に使用されたミニチュア土器であろうか。6世紀以前の資料と考えられる。

中世以降流路等出土遺物（第15図）

58～61は中世以降の流路等から出土した資料である。前述した河川跡①からの混入遺物を除き、出土資料は極めて僅少であったが、陶器、漆器、その他木製品が出土した。

58は瓷器系の陶器である。鉢等の底部と考えられ、高台が確認できる。

59-1～3は漆器椀である。重機掘削中に同一地点から発見されており、全て同一個体となる可能性が高い。全て内赤外黒の渋下地漆器で、黒地の外面には赤色漆で松紋風の文様が描かれている。顕微鏡分析の結果、外面ともに炭粉渋下地の上から透明漆層1層を施し、赤色部はその上から朱漆を重ねたものであることを確認している。樹種はクワ属である。

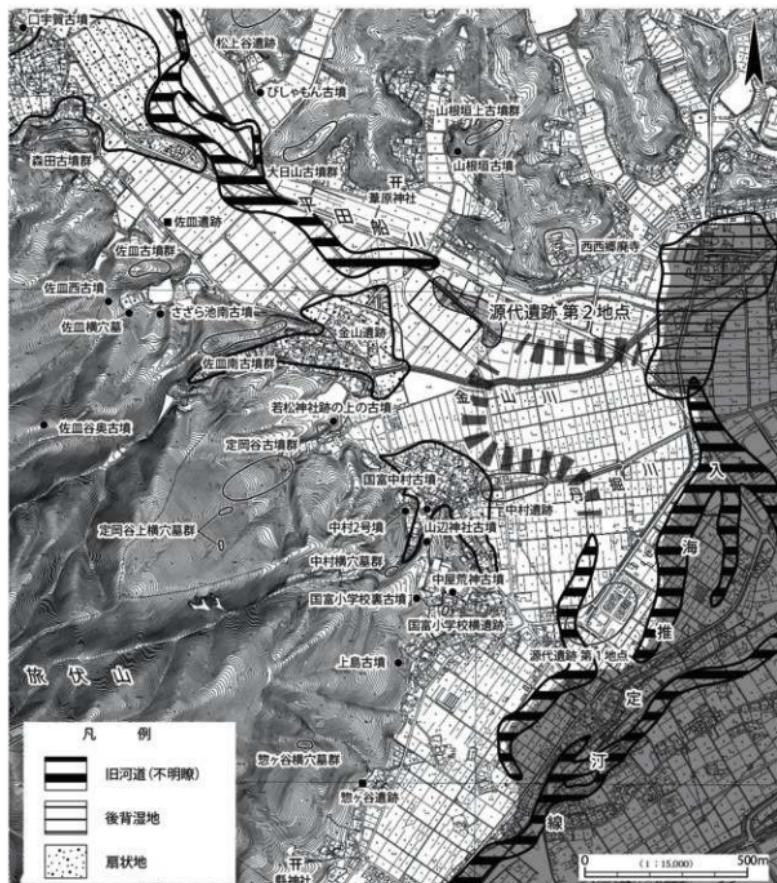
60・61はその他木製品である。板材の一部で、60には方形の穿孔が確認できる。樹種はいずれもスギである。河川跡①からの混入品である可能性もあるが、判別不能である。

中世以降流路等の詳細な時期については時期判別可能な資料が僅少であるため判然としないが、59の漆器椀については15世紀前後の資料と考えられる。

第4章 総括

第1節 河川跡について

今回の発掘調査によって、平安時代前期までの河川堆積層とその右岸（河川跡①）、古墳時代中期後半頃までの河川堆積層とその右岸（河川跡②）を確認した。なお、河川堆積層からは弥生時代前期か



国土地理院 HP 地理院地図 /GIS Map 治水地形分類図 - 更新版 (2007~2020年) から作図

第16図 源代遺跡周辺の遺跡と地形分類図

ら平安時代前期までの遺物が出土している。

調査地点は『出雲國風土記』記載の橋縫郡沼田郷と出雲郡美談郷の境界付近にあたり、その境界には「宇加川」と呼ばれた河川が流れていたとされる(第17図)。今回の調査で確認した河川跡も奈良時代における宇加川及びその前身の河川であったと考えられよう。

第16図には調査地周辺の遺跡分布状況と主要な地形分類を示した。源代遺跡第2地点の北西には旧河道に分類される地形が北西—南東方向に延びており、今回の調査で確認した河川跡と連続するものと考えられる。また、源代遺跡第2地点の南東方向にも北—南方向に延びた旧河道に分類される地形が2所確認できる。今回の調査で確認した河川跡は、その屈曲方向及び周辺地形から、いずれか、または双方の旧河道地形付近へ流れ込んでいたものと考えられる。『出雲國風土記』記載の「宇加川」の位置、「出雲郡」と「橋縫郡」との境界を検討する上で貴重な調査成果となった。

第2節 出土遺物について

墨書土器(第12図21・32、第18図)

今回の調査地で確認した平安時代前期までの河川堆積層(河川跡①)からは墨書土器2点が出土している。以下にそれぞれの墨書について検討する。

21は8世紀の須恵器杯で、底部外面に「奉」の文字が確認できる。8世紀代を中心とした時期の墨書土器においては、「奉」「本」「大十」「八十」「夫」が「奉」の省略文字または省略記号として数多く使用されていたことが指摘されており(平川1998、有富2016)、本例についても宗教的な奉斎に用いられた「奉書土器」(有富2016)であると考えられる。

32は9世紀の土師器杯で、体部外面に墨書が確認できる。墨書の一端は風化によって消えているが、出土地の歴史的地理環境から橋縫郡の「橋」の文字であると推定した。藤原京跡西五坊大路側溝出土木簡「橋縫郡」(奈良県立橿原考古学研究所2005)に見える「橋」の墨書にも類似している(第18図)。橋縫郡の公的施設等において使用された土器である可能性がある。

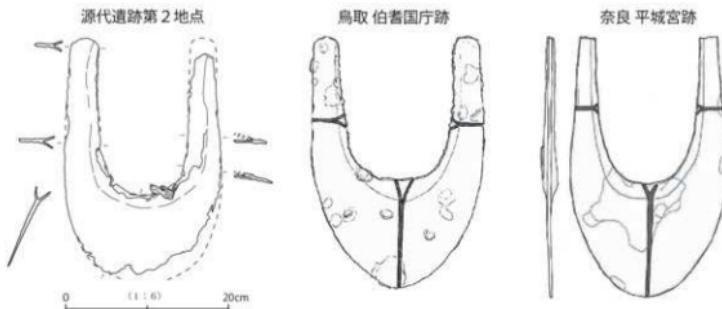


第17図 奈良時代の地理環境



第18図 源代遺跡第2地点出土墨書土器の文字

参考
藤原京跡西五坊大路側溝(四条遺跡)出土木簡
「橋縫郡」



第19図 鉄製U字形鎌鋸先「特大類」の類例

鉄製U字形鎌鋸先（第11図15、第19図）

河川跡①出土遺物中の鉄製U字形鎌鋸先（第11図15）は、復元長30cm前後にもなる大型品で、腰地孝大氏の分類「特大類」にあたる（腰地2015）。全長25cmを明らかに超えるものを分類基準とするが、全形が縦長で刃先が長いU字形となることも特徴である。

特大類の中でも本例と同等の大きさ（30cm前後）を持つ古代のU字形鎌鋸先出土例は東日本にはほとんど見られず、伯耆国跡（倉吉市教育委員会1976）・平城宮跡（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部1996）・平安京跡（京都市埋蔵文化財研究所1998）など、西日本の都城・官衙遺跡を中心に数例の遺跡で確認されるのみである（腰地2015、林2010）。また、伯耆国跡では5点まとめて土坑内に埋納され、平城宮跡でも井戸内へ破棄または埋納されるなど、儀礼的な廃棄行為をうかがわせる興味深い出土状況も確認できる。

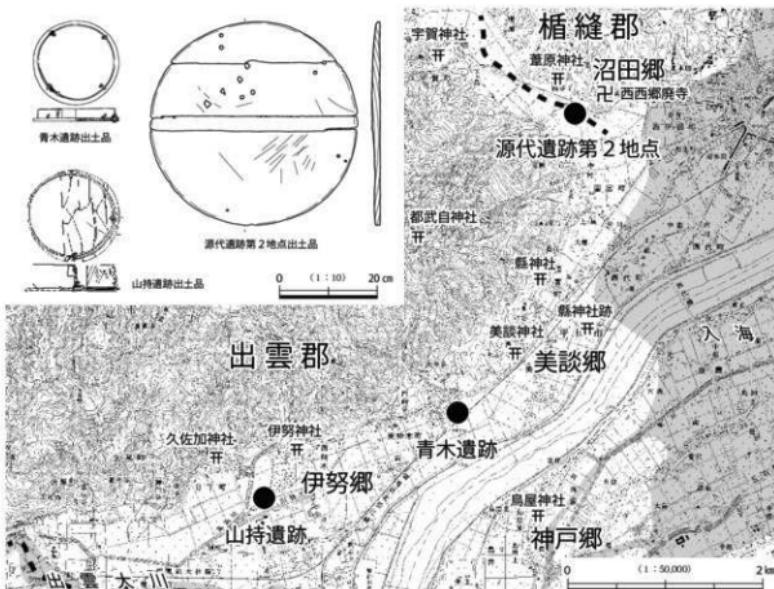
本例についても、貢納品等の公的所有物であった可能性や儀礼的な廃棄行為に用いられた可能性を考えておきたい。

樹皮結合曲物容器（第13図41、第20図）

その他、河川跡①からは結合孔を伴う円形曲物容器の底板（第13図41）が出土している。直径42cmの大形品である。

類例として、近隣の青木遺跡と山持遺跡から8～9世紀の遺物と共に同様な底板を有する樺皮結合の木製品が多く出土している（第20図、島根県教育委員会2006・2009）。これらの出土資料は源代遺跡出土品より小ぶりであるが構造は同じであり、同様の製品と見て良い。その用途としては、同一遺跡内における法量の統一性や出土状況等から、共同飲食等に用いられた祭紀用供膳具として使用されたものと理解されている（松尾2006b）。源代遺跡第2地点付近においても両遺跡と同様の祭祀が行われていたと考えられよう。

その他、青木遺跡・山持遺跡では古代に神仏祭祀の痕跡が確認できるほか、「美談」「伊努」「神戸」といった近隣地名を記した木簡や土器も確認できるなど、源代遺跡第2地点出土遺物との共通性が多く見られることも注目すべきである。



第20図 近隣の樹皮結合曲物容器出土遺跡

第3節 結語

今回の発掘調査においては、奈良時代に編纂された『出雲國風土記』記載の「宇加川」及びその前身の河川を確認できたことが大きな成果である。

また、古代の河川堆積層出土品中には祭祀関連品と推定した奉書土器・樹皮結合曲物容器のほか、公的施設等で使用された可能性がある墨書き土器〔楕カ〕も確認できた。鉄製U字形鍛錬先についても同様な性格を持った遺跡の存在をうかがわせる。これらの遺物群は付近の上流部に古代の祭祀関連施設、公的施設等が存在する可能性を示唆するものといえよう。

『出雲國風土記』から想定できる施設としては橋縫郡沼田郷庁、沼田郷新造院（西西郷廃寺）、葦原社（葦原神社）などの関連施設が挙げられる。遺跡の北方には、西西郷廃寺・山根垣古墳・山根垣上古墳群・大日山古墳群・葦原神社（第16図）が立地する低丘陵に囲まれた谷地形が存在しており、上記のような重要遺跡が発見される可能性があるエリアとして今後注視していきたい。

参考文献

有富鈴也 2016 「『奉』「本」「奉」などと記された墨書き土器に関する予備的考察」『アジア太平洋研究』41 成蹊大学アジア太平洋研究センター
加藤義成 1989『改訂 出雲国風土記参究』今井書店(改訂三版、初版は1957年)

賤地孝大 2015『古代鉄製鍊先に関する基礎的研究』名古屋大学大学院文学研究科教育推進室年報 Vol.9 名古屋大学大学院文学研究科教
育推進室

林正之 2010『古代における鉄製鍊先の研究—7世紀後半～11世紀の関東・東北を中心に—』『東京大学考古学研究室研究紀要』第24集 東
京大学考古学研究室

平川南 1998『墨書き土器の研究』吉川弘文館

松尾亮晶 2006b「奈良・平安時代の青木道路」『青木道路Ⅱ(伴生～平安時代編)』第3分冊(奈良・平安時代) 国道431号道路改築事業(東林木バ
イパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 島根県教育委員会

道路引用文献

京都市埋蔵文化財研究所 1988『昭和60年度京都帯埋蔵文化財調査概要』

倉敷市教育委員会 1976『伯耆國狩跡発掘調査概報(第3次)』

島根県教育委員会 2006『青木道路Ⅱ(伴生～平安時代編)』第3分冊(奈良・平安時代) 国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化
財発掘調査報告書3

島根県教育委員会 2009『山持遺跡vol.5(6)(C)』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7

奈良県立橿原考古学研究所 2005『奈良県道路調査概報(第2分冊) 2004年』

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部 1996『1995年度平城宮跡発掘調査概報』

写真図版



調査前（北北西から）



A 区（南西から）



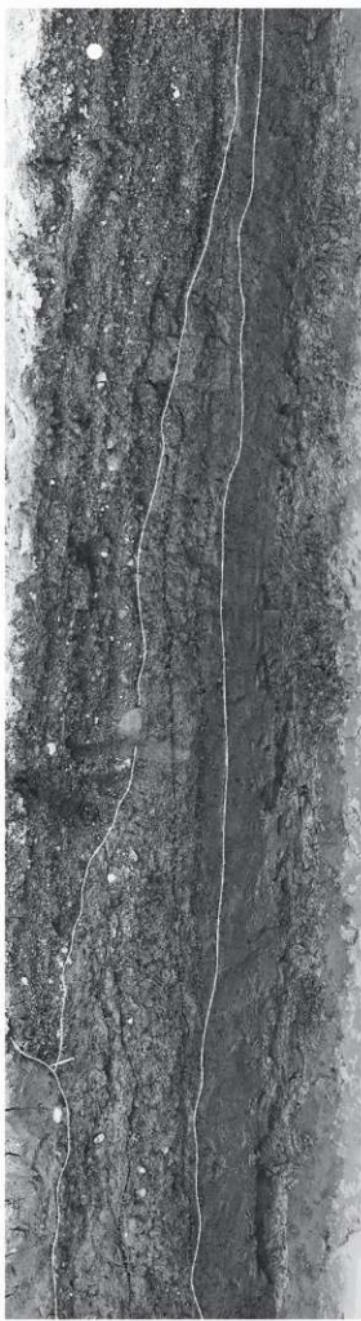
B 区（南東から）



A区河川跡①②土層堆積状況 1 (北西から)



A区河川跡①②土層堆積状況 2 (北西から)



B 区河川跡②土層堆積状況（北東から）

図版 4



B 区河川跡①②土層堆積状況（南から）



墨書須恵器「夾」出土状況（B 区・北西から）

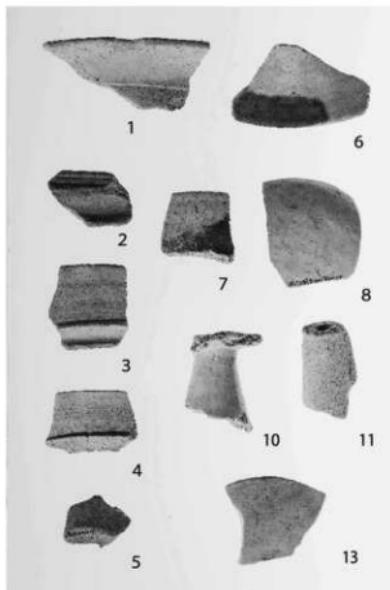


4 トレンチ土層堆積状況（南西から）



5 トレンチ土層堆積状況（西から）

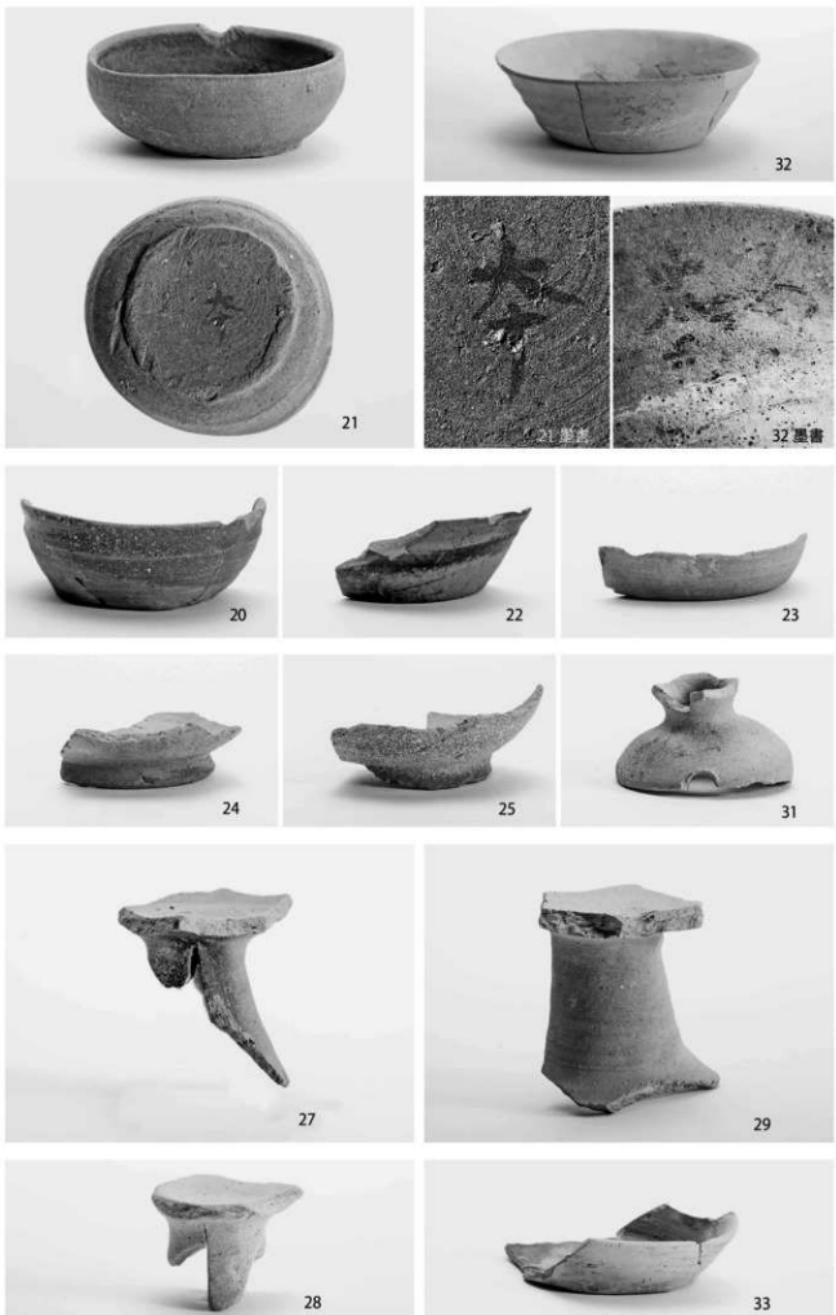
図版 6



河川跡②出土遺物

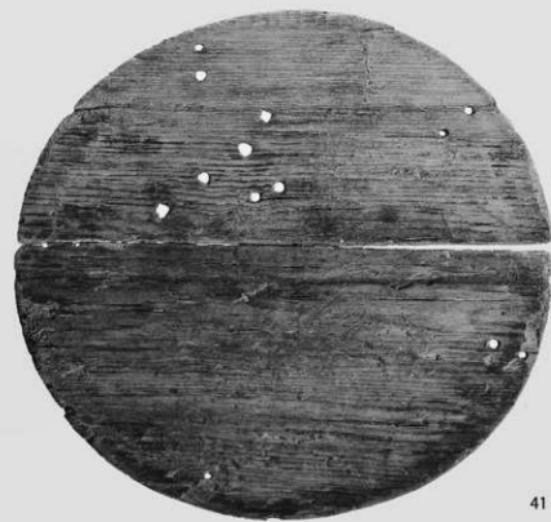
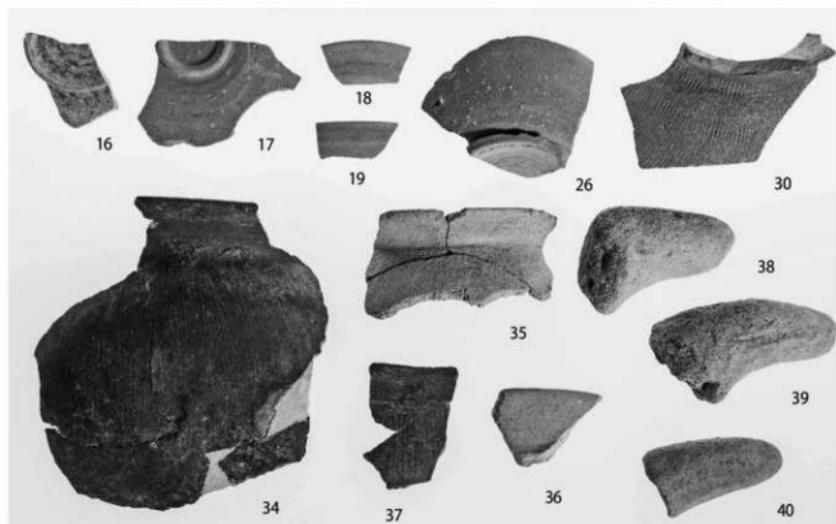


河川跡①出土遺物 1

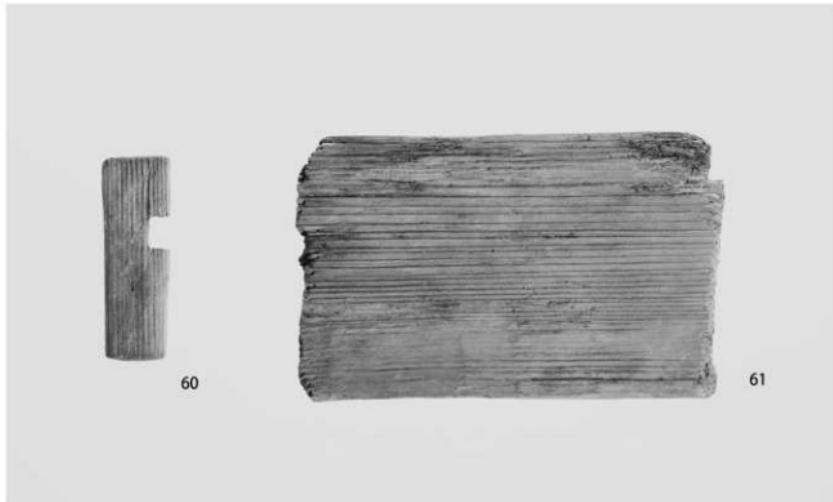
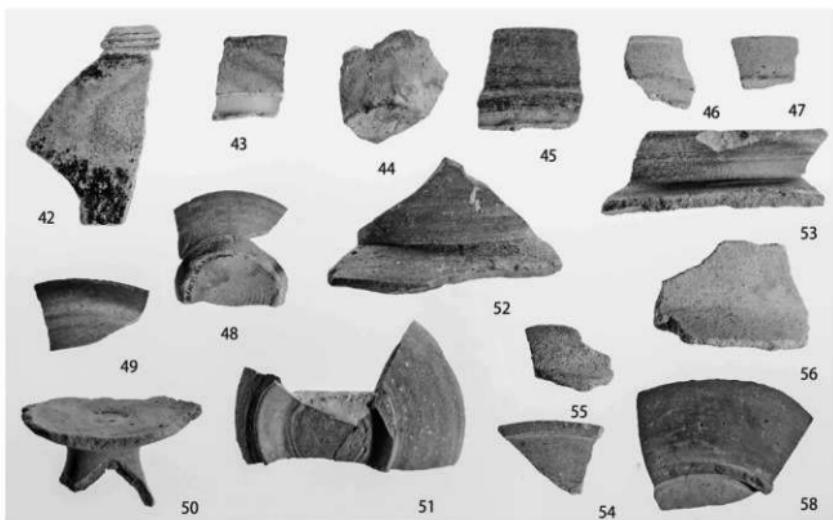


河川跡①出土遺物 2

図版 8



河川跡①出土遺物 3



その他の遺物

報告書抄録

ふりがな	げndaいいせき だい2ちてん					
書名	源代遺跡 第2地点					
副書名	平田4地区統合小学校整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	出雲市の文化財報告 48					
編著者名	須賀照隆（編）					
編集機関	出雲市 市民文化部文化財課					
所在地	〒 693-0011 島根県出雲市大津町 2760 番地					
発行年月日	2021年12月					
ふりがな	コード		北緯	東径	発掘期間	発掘面積
所収遺跡名	所在地	市町村				
源代遺跡	島根県出雲市 国富町 1371-3 ほか	32203	x107 <small>(前回遺跡番号)</small>	35° 26' 00" 132° 48' 07"	20200121 20200608 ～ 20200624	約 485m ² 発掘要因 小学校新築
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物
源代遺跡 第2地点	散布地	弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代		河川跡	弥生土器 須恵器 土師器 鉄製品 木製品	墨書き器 祭祀関連遺物 U字形鍬跡先
要約	<p>源代遺跡周辺部の調査結果を総合的に整理し、南部の第1地点と北部の第2地点に分断する形で遺跡範囲の変更を行った。</p> <p>また、今回の源代遺跡第2地点の発掘調査においては、奈良時代に編纂された『出雲國風土記』記載の「宇加川」及びその前身の河川を確認できたことが大きな成果である。</p> <p>また、古代の河川堆積層出土遺物中には祭祀関連遺物、公的施設等で使用された可能性がある墨書き器〔楕カ〕も確認できた。これらの遺物は付近の上流部に古代の祭祀関連施設、公的施設等が存在する可能性を示唆するものとして注目される。</p>					

出雲市の文化財報告 48

平田 4 地区統合小学校整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

源代遺跡 第2地点

2021年12月

編 集 出雲市市民文化部 文化財課
〒693-0011 烏根県出雲市大津町2760番地
TEL (0853) 21-6618

発 行 出雲市教育委員会
〒693-8530 烏根県出雲市今市町70番地
TEL (0853) 21-6874

印刷・製本 株式会社 報光社

